

国指定重要文化財 聖徳太子像

佛光寺の本堂左脇壇にご安置しているこの太子像は、第7代了源上人の勧進によって造られました。本山において全方向から礼拝していただけるのは、今回が初めてとなります。

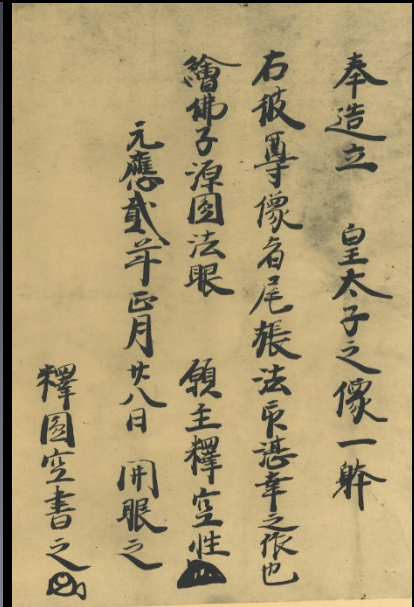
このお姿は、太子の父君、用明天皇の御病気を看護された16歳の時のものと伝えられ、髪を美豆良^{みずら}という古代男子の型に結び、お袈裟を着用しておられます。

内部に内剝を施した寄木造で、眼には玉がはめ込まれ、右手に笏^{しやく}、左手に柄香炉^{えごうろ}を持っておられます。

美術的な評価も高く、昭和10年4月、国の重要文化財に指定されました。



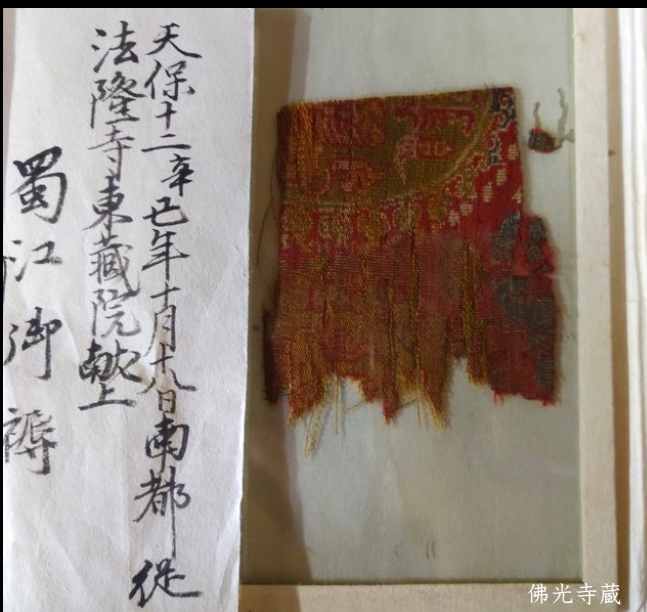
佛光寺蔵



昭和9年、お木像の胎内から、第4代了海上人の御遺骨とともに、一枚の文書が見つかりました。

そこには、仏師は尾張国の^{たんこう}湛幸、開眼は1320年1月28日であると記されています。

しよっこうにしききれ 飛鳥時代 蜀江錦裂



佛光寺蔵

2020年11月、佛光寺のお蔵から古い裂が見つかりました。調査の結果、今から約1300年前の飛鳥時代に織られたと考えられる法隆寺伝来の蜀江錦裂(大きさ約9.8×7.5cm)であることが確認されました。

佛光寺の『御日記(江戸後期)』には、聖徳太子ゆかりの法隆寺の修復に対し、佛光寺が協力していたことが記されています。

この裂と一緒に納められていた書には、1841年に佛光寺へ贈られたことが記録されています。

聖徳太子を深く敬われた親鸞聖人のお心を、代々受け継いできたひとつの証です。

室町時代の佛光寺



佛光寺蔵

聖徳太子絵像

南北朝時代(1366～1392年)のもので推定され、色彩が鮮やかに保存されています。

太子を礼拝してきた初期真宗教団の伝統を伝えるもので、正面向きの太子の足元には、蘇我馬子や小野妹子が描かれています。



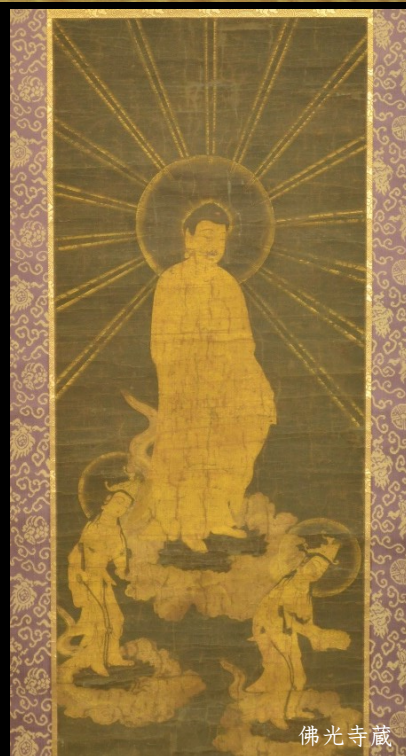
佛道寺蔵(米原市)

光明本尊

裏書によると、製作は1398年、第10代唯了上人の頃であると伝えられています。

ご本尊である九字名号を中心とした光明の中に、阿弥陀如来や釈迦如来が描かれ、お念仏を伝えてくださったインド、中国の高僧や、聖徳太子、親鸞聖人などが配されています。

光明本尊の画にはほとんど補彩がなく、当時のままと伝える価値あるお軸です。



佛光寺蔵

三尊来迎図

南北朝時代(1366～1392年)のもので推定される貴重な一幅です。

平安末期から念仏信仰が盛んになり、三尊来迎図が広まりました。

阿弥陀如来が観音菩薩と勢至菩薩を従え、私たちをお救いくださる姿が描かれています。



佛光寺蔵

もっこすしがた ←木瓜厨子型光明本尊

じょうたいし 磯長山上太子像⇒

室町時代、佛光寺が混迷した折に、大坂の奥野家は懸命に本山を護持しました。その功績から佛光寺より伝授されたのが左のお厨子です。左扉の下部に聖徳太子が配されています。右は奥野家に伝わる聖徳太子のお木像です。



佛光寺蔵